ま葉枯病をはじめ，条葉枯病，小粒菌核病，穂がれ等に対しても優れた治療効果を発揮する殺菌剤であり，また，従来の治療剤に対する耐性菌にも卓効を示すことから注目されている。また，ＴＩＡ－230は，殺虫・殺ダニ剤として蔬菜関係を中心に国内外で研究開発を進めている。

パダン，バリダシンは海外でも高く評価され輸出量・輸出国は年々増加しているが，今後さらに広い海外市場で通用する農薬創製研究が課題であり，時代の要請に応える新農薬を目指している。

なお，当社の農薬研究に関して，パダンで昭和47年に大河内記念技術賞を，バリダジンで昭和53年に大河内記念賞を受賞している。

昨今，農薬価格の引き下げ，円高，減反，農産物の価格低迷や輸入自由化など，我が国の農薬工業を取り巻く環境は厳しさを増す一方，世界の農薬業界は再編の最中にあり，日本においても欧米大企業の動きが一段と活発化している。それにともない，国内企業の存亡を賭けた研究開発競争が激化しており，新規剤開発はシェア拡大のための必須条件ともなっているため，研究開発力の強化は益々重要となってきている。

当研究所では，当社の総合力を生かした方向で海外も含めた総合的な研究開発力の強化策を推進中であり，バイオテクノロジー等の未来技術への対応も計りながら，高活性，高安全性，高経済性そして高独創性の４拍子そろった高水準の農薬を創出し，欧米の大企業に伍して21世紀における世界の農業に寄与する決意である。

人　事　往　来

クミアイ化学㈱　（２月１日付）

常務取締役	研究開発本部長	前田泰三
	研究開発部長	杉山弘成
	研究開発部次長	石原英助

退職（１月31日）加藤猛史（研究開発部長）

石原産業㈱　（２月１日付）

農薬事業部営業部副部長		生沼俊朗
〃	営業部副部長	松本喜男
〃	開発企画室副部長	溝井正彦

昭和63年度・植調編集委員会開催　２月３日13時30分より植調会館３階会議室において，植調第22巻編集委員会を開催した。広瀬和栄（果樹試興津支場），桂直樹（野菜・茶業試験場），杉山浩（農研センター），芝山秀次郎（農研センター），小渕一夫（日産化学），市橋正幸（石原産業），広田伸七（全農教）の委員（敬称略）。植調協会から，吉沢会長，吉田常務，小沢研究所長，則武技術部長出席。中山事務局長の司会により，各委員より提出された，論説，研究報告，技術解説，わが国と世界の農業情報についてのテーマ，筆者，掲載号案について，活発な論議が交わされ，卒直な批判と検討が加えられて，第１号～12号の素案が作成された。尚，巻頭言，試験成績概要，民間研究所めぐり，人事往来については従来の手法を継続されることになった。

財団法人　日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東１丁目26番６号
電話　東京（03）832－4188（代）

昭和63年２月発行
植調第21巻第11号　定価400円（送料170円）

編集人　日本植物調節剤研究協会会長　吉沢長人
発行人　植調編集印刷事務所　広田伸七

東京都台東区台東1－26－6 全国農村教育協会
発行所　植調編集印刷事務所
電話　東京（03）833－1821番（代）